

1998年4月24日(金)、物学研究会が旗揚げしました。

講師に建築家、安藤忠雄氏をお招きし、会員企業より約40名、物学研究会の事務局メンバーなど、併せて50名余りが集合し、3時間の研究会活動を始めました。

以下は第一回物学研究会の講師、安藤忠雄氏の講義のサマリーです。

安藤忠雄教授のバーチャル東大講座

「豊かに暮らすということ、豊かな社会とは」

はじめに

21世紀に向けて、豊かな生活には何が必要なのか？

最近、安藤さんにとって印象的だったのは、3月27日に開通した明石海峡大橋を歩いて渡るといふ記念イベントに招待され、全長4キロメートル、中間2キロメートルスパンの支柱がある吊り橋を体験したことだ。実際に歩きながら、日本の技術力の素晴らしさを実感したという。一方で、1995年に安藤さんの仕事の80パーセントがある阪神地区が大地震にみまわれた。阪神大震災だ。しかしその復興は大変な勢いで進められている。

そんな日本の現状を見るにつけ、安藤さんは現在大半の日本人は自信喪失状態にあるが、明石海峡大橋が象徴しているような技術力をもっているのだから、もっと自信をもつべきだと考えている。確かに、日本はひとつの方向づけ、ビジョン、目標があることに対してはすごい力を発揮するが、そのビジョンや目標を見つけることはヘタだ。だからこそ今が21世紀に何が必要なのかを真剣に考える時期であることを認識している。

安藤さんによれば、21世紀の生活や社会の創造に必要なことは、家族や地域といった生活のベースに根差した社会のために働こうという意志なのではないか。仕事も今までの延長ではなく、自分なりのビジョンを新たに考えだし、実践すること。以下最近の仕事を通じて、安藤さんの実践ぶりをまとめさせていただいた。

ワーク1

大山崎山荘美術館（所在京都府乙訓郡、竣工1996年）

この美術館を設計する際にまず考えたのは、高齢社会という時代に対して建築で何ができるのだろうかということだった。敷地にはもともと80年ほど前に建った日本建築があり、周囲の環境と調和した美しい風景を生み出していたという。そこで安藤さんは、この建物を修復し、さらにその下層部分に新しい美術館をつくろうと考えた。モダンな美術館もいいが、高齢者が愛着や郷愁を感じる建物や風景をそのまま見守っていくこと、ひとつの建物に異なる時代の建物が共存するという懐の深さ、こうした視点が21世紀には大切なのではないかと考えたからだ。館内にはモネの睡蓮やバーナード・リーチの作品が展示されている。ところが安藤さんが耳にしたところ、年間15万人（80パーセントは女性）の訪問者の中には、作品を鑑賞するのではなく、美しい風景を眺めながらお茶を飲んで帰ってしまう人もいるそう。まあ、それもいいかなあというのが安藤さんの感想だ。

ワーク2

ギャラリー野田（所在・神戸市灘区、竣工・1993年）

この住宅の設計で感じたのは、夢さえあれば創造性は発揮できるんだということだった。安藤さんは、1960年代、70年代には現実が伴っていないのにやたら夢が大きい人が多かったのに、最近はそういう人がだいぶ減ってしまったと、一抹の寂しさを感じている。

さてこの家のオーナーは、安藤事務所にギャラリーのある住居を設計して欲しいと言ってきた。安藤さんはプランに興味をもったので神戸三宮の敷地を見に行くと、たった12坪ほどの三角形の土地、その上、資金が3500万円しかないという。安藤さんはこの厳しい条件の中で住居とギャラリーを共存させようと格闘した。しかしそれにしても、とにかく厳しい。ギャラリーのような豊かな空間を実現させ、さらにトイレもバスタブもキッチンもあるなんてことは到底不可能だった。そこで、オーナーにたいして、街全体が生活圏だと割り切っていただくことにした。つまり、風呂は近くの銭湯に、ゆっくりコーヒーを飲みたければ近くの喫茶店に行ってください。その代わりに、ギャラリーとしても使えるような豊かな空間は作る！

狭い敷地、お金がないという悪条件は、オーナーの生活へ割り切りと美術品と共に暮らしたいという夢によって克服できたと安藤さんは振り返る。

プロジェクト1

大阪中之島プロジェクト（1989年～）

1989年、安藤さんはこのプロジェクトを提案した。大阪の中心中之島に、地上は緑豊かな公園、地下に5000坪という大規模な美術館を作ろうというものだ。これは誰に依頼されたわけでもない。安藤さん自身が、大阪の中心には緑がない、ならば、中之島に公園と文化の拠点を作ってはどうだろうと、長年暖めてきた構想を提案したものだ。実は、1969年にも安藤さんはある提案をしていた。それは緑のない梅田界隈の再開発ビルの上層階に美術館やホールといった文化施設、屋上には空中庭園を設けて、それらをブリッジで結んでみてはどうだろうという内容だった。

こうした背景があって、1989年の時点で再考したのがこの中之島公園プロジェクト。結局この案は実現しなかったが、最近、コンペがあってアメリカの建築家シーザー・ペリがここに大掛かりな施設を設計することが決まったそうだ。安藤さんは自分が手がけられなかったことはとても残念だが、意図を汲み取ってもらったという点では、提案が無駄ではなかったと納得しているそうだ。

プロジェクト2

グリーン・ネットワーク（1995年～）

阪神大震災で安藤さんにとって印象的だったのが、子供たちが元気だったということだった。子供たちは学校に行かなくていい、親に勉強を強制されないといった震災直後の状況の中で、悲惨ではあるけれどつかの間の自由を得て生き生きとして見えたという。そんな子供たちにたいして、震災という出来事を単なる悲劇としてだけでなく、復興という前向きな形で残してやれないだろうか考えたのが、グリーン・ネットワーク。震災の跡地に新しい建物を建てる際に、復興のシンボルとしてこぶしや木蓮などの木々を植えていこうというものだ。実際には木を植えることよりも育てていくことのほうが大変だそうで、木々の成長が子供たちや地域のコミュニティー再生のシンボリックな存在になってくれることを、安藤さんは期待している。

このプロジェクトには多くの方々が協力してるらしいが、委員長である安藤さんが一番奮闘していますとのこと。

ワーク3

真言宗本福寺水御堂（所在・淡路島、竣工・1991年）

この仕事では、日本に古くから存在する権威や常識といった因習を壊して、新しい思考や造形を実現することの困難を経験したという。ここでは、本堂に詣でる人はまず楕円形をした蓮池の中央にある階段を下がっていく。つまりこの池は建物の屋上なのだ。寺の屋上に蓮池がある。そして蓮池に吸い込まれるようにして、階下の

本堂に入っていく。本堂は朱赤に塗られ官能的でさえあるという。

安藤さんがこの案を見せたところ、もちろん猛反対を受けた。寺には立派な屋根があるもんだ。瓦屋根の代りに池があるなんてとんでもない。神社仏閣建築の権威がまったく感じられない。屋上を池にしても天井から水が漏れたらどうするんだ……。要するに、提案された側は危険なことや今までとは違った新しいことにチャレンジしたがらなかった。ところが、京都仁和寺の住職さんがこの案をえらく買ってくれた。偉い人がOKといったら、それまで散々反対を唱えていた人々も一転してOKしたそうだ。

実際の設計にはもちろん細心の注意が払われ、さまざまな工夫が施されている。創造性や個性が大切といっても、建物なのだから現実性や客観性も重要だというのが安藤ポリシーなのだ。今では、1日100人、多いときでは200人が訪れるようで、本福寺は町の観光名所になっている。また、阪神大震災の際には、池の水が生活用水として大変役立ったと感謝されたという。

ワーク4

六甲の集合住宅

(所在・神戸市灘区、竣工・一期工事1983年、二期工事1993年、三期工事1998年予定、四期工事?)

不可能を可能にするというのがこのプロジェクトの始まりだったと、安藤さんは語った。敷地は500坪、傾斜60度という急斜面。上から見下ろしてみると膝がガクッとするくらいの急勾配だったという。困難が予想されるこのプロジェクトのなかで、一番の問題はどこの建設会社も工事を請け負ってくれなかったことだった。60度の斜面となれば基礎工事も困難を極めるわけで、当然といえば当然だった。そんな時に、当時25歳という意欲的な社長が工事を引き受けてくれた。次の問題が分譲なのになかなか売れなかったこと。誰も最後まで完成するとは思っていなかったのでしょう、けれど完成したらすぐに売れました、と安藤さんは振り返る。一期工事が終わってしばらくして、安藤さんは頼まれもしないのに二期のプロジェクトを提案した。敷地は六甲の集合住宅Ⅰの隣接地でやはり60度の傾斜地だが、完成した集合住宅では各住居に階段状は配されているために、広々としたテラスから神戸の海が見渡せるそうだ。安藤さんはさらに、ⅠとⅡの集合住宅の住人の間にコミュニケーションが生まれてくれたらいいなあと、中庭や室内プールも作った。美しい風景が楽しめる、自然を感じられるということと同じくらいに、近隣とのコミュニケーションが大切だと考えるからだ。

さて、現在進行中なのが六甲の集合住宅Ⅲだ。かつては神戸製鋼の社宅だったものを、安藤さんはまた依頼されてもいないのに勝手に設計して提案していた。それが大震災で建て直さなければならなくなり、ようやく実現することとなった。ここには7000坪の土地に200個規模の集合住宅が建設中で、近々完成の予定。

けれども安藤さんの夢は終わらない。六甲の集合住宅IVの準備に取り掛かり、図面はもできあがっているとのこと。2010年くらいまでには実現したいと意気盛んだ。もちろん設計依頼は受けていない。安藤さんにとっては先行投資にすぎない。

まとめ

子供たちに何が残せるのか

安藤さんは、日本の子供は元気がないという定説は認めていない。さらに子供たちに何を残せるのか、彼らの時代に何を伝えるのか・・・そうした視点こそが重要なのだと考えている。そして、ひとつのアプローチとして、まず日本人一人一人が、自分の職能で何ができるのかを考え、実現していくことなのではないかという。安藤さんは講義の締めくくりとして、建築家という職能をもって、老若男女が共に暮していけるような都市を作っていきたいと語った。

安藤忠雄氏によるスライドを使った80分ほどの講義の後、安藤氏の建築設計システム、日本のインダストリアルデザインへの感想などの質疑応答が行われた。最後に物学研究会代表、黒川雅之氏より「真剣に希望することが、生き生きと仕事をすることになり、10年かけてもかならず実現するという、安藤さんのやり方になっているのですね」というコメントし、研究会は終了した。